

# 研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.7 谷津バラ園

前回の記事では神代植物園のバラ園を訪問したが、今回は谷津バラ園（千葉県習志野市）を訪れよう。訪問の第一目的がバラではなくセメント彫刻なのは筆者ぐらいだろう。同園で筆者が心のなかで感じた「意外とキレイだな」「白いな」「手入れはされている」などの感想の主語は、バラではなくセメント彫刻である。今回の訪問で改めて「セメント彫刻にはバラがよく似合う」との思いを強くした。真っ白な彫刻と鮮やかな緑や派手やかな花びらとのコントラストが強調され、互いにその魅力を引き立てる。セメント彫刻があるバラ園といえば、生田緑地ばら苑（旧向ヶ丘遊園ばら苑、神奈川県川崎市）も有名だ。筆者は上記の3園を「セメント彫刻の三大バラ園」と勝手に呼んでいる。この三大バラ園すべてにかつての小野田セメント株式会社が寄贈したセメント彫刻が設置されている。

谷津バラ園の約12,600平米の敷地内には、世界各国の800種、7,500株のバラが噴水を中心に整然と植えられている。同園に置かれた白亜のセメント彫刻の多くは、小野田セメント株式会社による寄贈である。寄贈作品のうち現存するのは（2023年6月時点）、中川為延《花の姉妹》（一対）、斎藤高徳《白いコスチューム》、山本稚彦《フローラの像》、橋本堅太郎《華》である（写真1および2）。谷津バラ園に面する谷津干潟から、ほのかに潮の香りが漂ってくる。同干潟はシギ類、チドリ類、カモ類などの渡り鳥の希少な生息地であり、国指定谷津鳥獣保護区とラムサール条約登録地として保護されている。バードウォッチングも兼ねて谷津バラ園を訪れるのもいいだろう。また、同園入口の脇には「読売巨人軍発祥の地」の碑がある。ジャイアンツファンの方にとっては必須の訪問スポットだろう。多種多様な見どころに溢れる谷津バラ園である。

太平洋セメント株式会社の所蔵写真を見ながら、谷津バラ園のセメント彫刻の現在と過去とを比較したところ、作品の構成に変化が生じていたことが判明した。そもそもこの谷津バラ園は、谷津遊園に付属するバラ園として、1957（昭和32）年に開園した。秩父宮勢津子妃殿下も訪れ、写真には咲き乱れるバラに囲まれて笑顔の同妃殿下の姿が捉えられている。このほかにも、同園のセメント彫刻を撮影した写真も含まれている。そのうち今回の取材で現存が確認できなかった作品が数点あった。それは早川巍一郎の2体の裸婦像やイルカに乗る童子像（作者不明）である。また、谷津バラ園の前身である谷津遊園には、中村暉《狩に出るダイアナ》が設置されていたが、これも確認できなかった。

これらの作品が姿を消した契機は改修工事かもしれない。谷津遊園は1982（昭和57）年に閉園。1988（昭和63）年には谷津遊園から谷津バラ園への改修工事が実施された。逆にそれまで設置されていたかった橋本堅太郎《華》（1985年）が加わっている。改修工事の際に作品の入れ替えがあったのかもしれない。改修工事の様子を撮影した写真も残されており、前述の《花の姉妹》に台座が加わったのもこの改修時であることも判明

した。全体として作品数が減じているものの、制作から60年以上を経た現在も、こうして作品を見るすることは非常にありがたいことだと思う。今回は香り立つ春のバラ園でのセメント彫刻鑑賞となった。



写真1 中川為延《花の姉妹》



写真2 齋藤高徳《白いコスチューム》